

多角的な見方を育てるための国語科の授業実践とは

ーグループ活動を通してー

鈴木萌夏 (M19EP028)

1. 問題と目的

千葉・武川・望月・山下 (2010) は、グループワークを進めていく中で多くの問題が存在し、特に、話に参加することができない生徒がいることを問題視している。自分の状態や他のメンバーの状態、グループ活動をしている生徒が、グループ全体の状態を把握できないために、「メンバーが割り与えられた作業をしない。」「メンバーのグループワークに対するモチベーションが低い。」といった問題が起これ、グループワークが停滞してしまうという。本稿では、このような論文を踏まえた上で、生徒それぞれが自分だけの意見に固執せず多角的に考え、また、友達のような意見を聞こうとする姿勢を育むことのできるグループ活動を実施し、その有効性を検証することを目的とする。

2. 筆者の目指すグループ活動

筆者は、受験との折り合いが難しいという点が問題点ではあるが、グループのみんなで1つの正解を求めようとするグループ活動から、1つの考えだけに固執せず、多くの考えに触れ、多角的な見方をするグループ活動を目指している。1つの正解を求めようとするグループ活動ではなくて、多くの考えに触れようとするグループ活動を行うことで、1人で考えていても気づかなかったことを発見することができる。神奈川県立総合教育センターの『はじめよう学習活動研究会～主体的に学ぶ生徒をはぐくむために～』には、多様な意見を知ることによって本質により近づきやすくなり、また、多様な考え方や学び方があることに生徒自身が気づくことによって、自分の考え方や

学び方が広がったり深まったりするというように述べられている。ここからも、多様な考えに触れるグループ活動が必要であると考えられる。

3. グループ活動で身に付けさせたい力

筆者の目指すグループ活動をでは、生徒に身に付けさせたい力が3つある。

1. 「自分の考えを相手に表現する力」
2. 「多様な考えを聞こうとする力」
3. 「相手の意見を尊重する力」

以上の3つである。これら3つの力を育てることで、多角的な見方につながっていくのだと考える。グループ活動には、教師からの働きかけが重要であり、3つの力を作る基盤として必要なことを2つ挙げる。1つは「指示を明確化させる。」、2つ目は「対話という活動」である。

①指示を明確化させる

まず教師が指示を明確化させることで、生徒自身が授業の中で何を問われているのか、何をしたら良いのかが分かり、また、授業の流れが円滑に進むと考える。

②対話という活動

岩崎 (2013) が、「対話」という活動は、他者の読みを自分のものとして内化させたり、曖昧な自分の読みを他者の言葉によって造り替えることができると定義している。このことから、対話の活用によって生徒同士が対話をする授業にしていくことが重要であると考えられる。例えば、グループ活動で行き詰まっている班や一つの意見でまとまっている班があったら机間巡視しているときに「他の班ではこんな意見が出てたけど、どう思う？」というように、教師がまず知的好奇心を刺激して、グル

ープ活動内においてみんなで考え、「分かった」の授業にしていけることが望ましいと考える。そうすることで、より授業の内容も深まったものになっていくと考える。

4.授業実践

(1)対象及び時期

公立中学校1年1組の生徒29名を対象として、2019年9月17日から9月25日に全4時間の授業構成で実施した。

(2)教材について

教材は、「星の花が降るころに」安東みきえ（光村図書「国語1」）で実施した。

あらすじは、主人公である“私”には小学生の頃から仲の良い友達「夏実」がいる。「夏実」とは中学に上がってもずっと親友でいようと約束をしていたのだが、何度かのすれ違いや誤解が重なってしまう。“私”は、「夏実」に話しかけようとするが、タイミングの悪さもあって思うようにいかない。“私”は失望するが、そこに幼馴染の「戸部君」が現れる、私を元気づけてくれる。“私”は、幼いと思っていた「戸部君」の成長に驚く。下校途中、「夏実」との思い出の公園に寄って見た常緑樹の銀木犀は、一年中は葉を茂らせているのではなく、古い葉を落として新しい葉を生やして生きていることを知る。銀木犀を見ながら、“私”は「夏実」との関係に思いを巡らせて自分の生き方について考えていくというものである。

友人関係で悩んでいるにも関わらず、がさつに関わってくる「戸部君」のような生徒は実際にも存在するのではないかと思う。「戸部君」のような存在が実は自分に大きな影響を与えていることに気づかされることを体験することがあるのではないかと思う。自分自身の経験を踏まえて、登場人物の心情を読み取っていった欲しいと考える。

(3)グループ構成

人数は、5～6人班×6で組み、班は生活班で行った。この生活班は、積極的な子と消極的な

子が混在していて、普段あまりグループ活動内において発言することができない生徒に対して、「なんて書いたの？」や「どう思う？」というように、普段グループ活動に積極的に参加している生徒が声を掛けていて、助け合いができる班である。通常、グループ活動は4人程度が話しやすいと言われているが、今回は、日常から生徒同士で助け合いながら話すことができていたため、生活班で行った。

(4)グループ活動の取り入れ方

生徒たちが普段行っているグループ活動は、読みに対する共通理解を図るものが中心である。それに対して、筆者は、生徒たちに多角的な見方を身に付けて欲しいため、友達の考えを聞いたり、自分自身の考えを相手に対して自由に表現したりするグループ活動を取り入れたいと考えた。自然にそのような形になるように、主に、2時間目～3時間目までは、グループ活動が活性化するように、日頃から慣れている、ある程度の読みに対する共通理解を図るグループ活動を行うこととした。最後の4時間目で多くの考えに触れることが出来るようなグループ活動を取り入れた。最初から多くの考えに触れるというグループ活動をする、と、一部分の人が話して終わってしまい、グループ活動を有効的に行うことができないと考えたので最後にしっかりとグループの一人一人が考えを持ち、交流できるような活動を取り入れた。

(5)授業展開

表1 授業計画の内容

1時	2時
【授業の柱】 1. 意味調べ 2. 本文を読む 3. 感想を書く	【授業の柱】 4. 本文を読む 5. 場面の確認 6. 「私」の夏実への気持ちを考える

【具体的な活動内容】 ・ 8 つの意味を班ごとに調べさせ、グループの代表者が発表をして、周りは意味をノートに書く。(柱 1) ・ 「良いと思った表現・みんなで考えたいと思った点・感想」の三つを聞くワークシートを書く(柱 3)	【具体的な活動内容】 ・ 時間や場所が分かる表現に着目させる(柱 5) ・ ワークシートに私の夏実への気持ちが分かる部分を抜き出す(個々) - 班で自分のワークシートを回して意見交流班ごと発表(柱 6)
3 時	4 時
【授業の柱】 7. 前回の復習(私の夏実に対する気持ち) 8. 本文を読む 9. 「私」の戸部君(くだらないことを話しかけてくる)への気持ちを考える。 10. 「私」の戸部君(落ち込んでいる私を冗談で笑わせた)への気持ちの変化を考える 11. 本文の一部分を音読 12. 前後で「私」の戸部君への気持ちに変化があったのかを考える	【授業の柱】 13. 前回の復習(「私」の戸部君に対する気持ち) 14. 銀木犀について 15. 「私」と夏実の人間関係を考える 16. グループで考えたものを全体で発表して共有 17. 感想を書く
【具体的な活動内容】 ・ 戸部君のことが分かる部分に線を引きな	【具体的な活動内容】 ・ 本文に出てくるおばさんの話を聞く前後で

がら本文を追っていく(柱 8) ・ ワークシートに「私」の戸部君への気持ちを個々に考えて書き、その後班で考え、ホワイトボードに班で話し合ったことを書いて黒板に貼って発表(柱 9・10)	私にとっての常緑樹の銀木犀はどのように変わったのかを考える(柱 14) ・ 「私」と夏実の人間関係はこれからどうなっていくのかを理由と共に考える(柱 15) ・ 友達の発表で良いなと思った考えをワークシートに記入(柱 15) ・ ワークシートを個々で記入した後、グループで自分たちの考えを共有(柱 15) ※ここで今まではみんなの考えをまとめるというようにグループ活動をしてきたけれど、今回はたくさんの考えに触れましようというように指示を出す ・ グループごとに代表者が発表(柱 16) ・ ワークシートに感想を書く(柱 17)
---	--

①1 時間目

意味調べをした後に本文を読み、初読の感想を書かせる。ここでの意味調べは、意味を班ごとに調べさせ、グループの代表者が発表をして、周りは意味をノートに書く活動である。

初読の感想シートは「良いと思った表現・みんなで考えたいと思った点・感想」の三つを聞くもので、PMI シートを参考にしている。PMI シートとは、黒上・小島・泰山(2012)によれば、対象について、「いいところ(プラス:Plus)」

「だめなところ (マイナス: Minus)」「興味をもつこと・おもしろいところ (インタレスティング: interesting)」の3つの視点から印象や意見を書き込むものであると定義している。生徒の興味関心がどこにあるのか、教材とどのように向き合おうとしているのかを教師が知ること・生徒と教師が今後の見通しを持つため・生徒が多角的に考えることを目的としている。普段よく行われている感想だけを書かせる初読のワークシートと比べ、幾つかの観点が与えられた方が生徒の負担が減り、より様々な考えを出しやすいというように考えた。

筆者は、このPMIシートを踏まえて、「良いと思った表現・みんなで考えたいと思った点・感想」の3つを聞くこととした。黒上ら(2012)のように「だめなところ (マイナス: Minus)」を入れなかったのは、生徒に始めから教材に対してマイナスなイメージを抱いてほしくなかったからである。その代わりに、感想とした。生徒がこの教材について引っかかるところがあつたと感じたらそこに書いてもらったら良いと考えた。「いいところ (プラス: Plus)」「興味をもつこと・おもしろいところ (インタレスティング: interesting)」の2つには、重なる部分があり、生徒にこの二つの問いを出したときに区別が難しいと考えたので、「良いと思った表現」「みんなで考えたいと思った点」の2つに置き換えた。「みんなで考えたいと思った点」で問いを入れたのはPMIシートの目的にも掲げられているように、生徒と教師が今後の見通しを持つためである。しかし、残念ながら時間が足りず、2時間目以降の授業に上手く活用できなかった。

成果として、ワークシートから以下のような記述が見られた。

(生徒A) おばさんが「どんどん古い葉を落とし、その代わりに新しい葉を生やす」という言葉で嫌なことは忘れ、楽しいことを考えようという表現だと考えた。

(生徒B) 半円球の宙にまたたく星みたいに光っていた。というところで「空」ではなく「宙」って書いてあるところとか、宙が半円球でとても壮大な感じがして良いと思った。

(生徒C) 「あたかもしれない」という表現が良いと思った。

生徒Aや生徒Cは、「どんどん古い葉を落とし、その代わりに新しい葉を生やす」や「あたかもしれない」という、これからの“私”の生き方や「戸部君」の存在に関する、本文の中で重要な表現に気づくことができている。また、生徒Bは、「半円球の宙にまたたく星みたいに光っていた。」という表現を書き写っていて、ただ感想を書くだけのワークシートだったら気づくことがないであろう表現に焦点を当てることができている。幾つかの観点が与えられたワークシートを使用したことにより、生徒たちが多くの視点を持って教材に向かうことができた。

②2 時間目

“私”の夏実への気持ちを考えさせる。ワークシートに“私”の夏実への気持ちが分かる部分を抜き出す活動を個々で行い、その後、グループで自分のワークシートを回して意見交流し、班ごとに発表させた。グループの中の人だけではなく、1人1人の考えを知って欲しいのでワークシートを回すという活動を入れた。グループで意見を共有することで、ワークシートが空白になっている生徒の書きづらさを軽減することを目的としている。ワークシートを回すというような言葉を交わされない活動は通常であればあまり行われないうり方ではあるが、生徒の中には、授業には関係ないことを話してグループ活動に参加しないというようなこともあり得るので、今回はワークシートを回すというやり方で行った。

成果として、ワークシートが空白になっている生徒に書こうという姿勢ができたことである。友達の考えと同じことを書いている生

徒がいても、丸写しという生徒はあまりいなく、自分の言葉で頑張っているように書いていた。

③3 時間目

“私”の戸部君（くだらないことを話しかけてくる）への気持ちを考えた後に、“私”の戸部君（落ち込んでいる私を冗談で笑わせた）への気持ちを考え、前後で“私”の戸部君への気持ちに変化があったのかを考える。ワークシートに“私”の戸部君への気持ちを個々に考えて書き、その後、グループで考え、ホワイトボードにグループで話し合ったことを書いて黒板に貼って発表させた。目的としては、普段から行われている形式なので生徒のグループ活動に対する抵抗感を軽減させることである。グループ内で話し合ったことが視覚化することで生徒の思考の整理がしやすいと考え、また、様々な視点を持つことができると考えたことからホワイトボードを使用した。成果は、気持ちの変化を分かりやすくまとめることができていたことである。

④4 時間目

銀木犀は常緑樹で一年中葉っぱが茂っていると“私”は思っていたけれど、お婆さんの話で古い葉をどんどん落として新しい葉を生やすということを知って私の見方が変わり、このことが私の生き方にもつながっていることを順序立てて考えていくこととした。グループ活動に入る前にこの活動を全体で行うことで、次に行うグループ活動とつながりができ、より生徒が考えやすいという点と本文中の銀木犀の部分の表現を味わってほしかったという教師側の意図があり、取り入れた。

その後、考えたことをヒントにして、“私”と夏実の人間関係はこれからどうなっていくのかを理由と共に考え、グループで考える時間を多く確保し、考えたものを全体で発表して共有させた。前掲神奈川県立総合教育センター『はじめよう学習活動研究会～主体的に学ぶ生徒をはぐくむために～』には、教師にと

って沈黙は怖いものだが、生徒は沈黙の間に思考し、そこから学びが生まれるのでこの時間を十分に保証することと述べられている。筆者自身、授業を行ってみて、授業の時間には限りがあるため、グループでの話し合いにどれだけの時間を割いたら良いのか、沈黙な時間があるか教師側の働きかけが何か必要なのではないかということ考えた結果、机間巡視した際にまだ十分に考えが出ていないと判断したため、多く時間を取るに至ったが、今回行ったような多くの考えに触れさせるというものや多くの考えを出したいというグループ活動であれば、グループで話し合う時間を十分に取ることが重要であると考えた。

グループで考える際に、友達の発表で良いなと思った考えをワークシートに記入させる。1つの考えだけではなく、多くの考えに触れて欲しいと考えたため、グループ活動を行う前に、「3時間目までは、みんなの考えをまとめるといようにグループ活動をしてきたけれど、今回はたくさんの考えに触れましょう。」というような指示を出し、全体で確認をした。目的は、一つの考えだけではなく、多くの考えに触れさせることである。成果は、他のグループの意見を聞いてさらに気づいた点があった、考えが変わったという生徒がいたことから生徒自身の考えを深めることが出来たということと、生徒から「〇〇さんは何を書いた？」のような声が聞こえ、聞く姿勢ができたということである。

最後に読後の感想を書いた。

(6)生徒の記述

4時間目は以上のように行ったが、ここではワークシートの生徒の記述から授業を分析する。

①銀木犀に関する記述

4時間目でグループ活動に入っていく前に、銀木犀が“私”のこれからの生き方につながっていることを確認するという活動を行ったところ、読後の感想から次のような記述が生徒から見られた。

(生徒 D) “私” が夏実のことで悩んでいても銀木犀の話で立ち直れたことに良いなと思った。この出来事は様々な悩みも解決できると思った。自分が“私”のように悩んだらこの話を思い出して前向きに毎日過ごしたい。

(生徒 E) 銀木犀のように葉が落ちてまたすぐに新しい葉を生やすことから、前向きに勇気が出ると思った。私が銀木犀によって勇気が出て一歩踏み出したのはすごいと思った。

(生徒 F) この小説で出てきた銀木犀や戸部君などの一つ一つに意味が込められていて面白いと思った。例えば、銀木犀は常緑樹だけど古い葉を落とすように“私”も今までの自分は切り捨ててこれから頑張ろうという気持ちが込められていた。

(生徒 G) なんでいきなりおばさんの話が出てきたのか銀木犀の必要性が分からなかったけれど、深く考えてみると銀木犀の話は「自分」が変わるために必要な話だったのだと思いました。

(生徒 H) 銀木犀を通して変わろうとしたのはすごいなと思った。

これらの記述から、全体で確認をした銀木犀の存在をヒントに考えることができていくのが分かる。「銀木犀は常緑樹だけど古い葉を落とすように“私”も今までの自分は切り捨ててこれから頑張ろうという気持ちが込められていた。」という例えを出している生徒もいて、グループ活動に入る前に考えた銀木犀を“私”と夏実の人間関係はこれからどうなっていくのかというところにつなげてより深く読み取ることができている。また、「自分が“私”のように悩んだらこの話を思い出して前向きに毎日過ごしたい。」というような記述があることから、自分事として置き換えて、登場人物の心情を考えることができていることが分か

る。

②初読のワークシート

次に、1 時間目で生徒に書いてもらったワークシートと読後のワークシートを比較してみたい。

(生徒 I) 中学生の“私”の心理、人間関係がつまっていておもしろかった。戸部君はおもしろくていい人かもしれないと思った。この作品の中に少し共感できる場所があった。

(生徒 J) この話は、戸部君と“私”の関係を深々感じられる話だと感じた。

(生徒 K) “私”が夏実と仲直りしたいのにできない気持ちが分かった。

(生徒 L) いろいろな分かりやすい表現があってとても読みやすい小説だった。

(生徒 M) なんとなく最初と中ばんのストーリーは分かったけれど最後の方が良く分からなかった。

③読後のワークシート

(生徒 N) 私は、3 班さんの意見を聞いて考えが変わった。初めは銀木犀という夏実との思い出を切り捨てるような形で前を向いたと読み取っていた。しかし、3 班さんの意見は“私”と銀木犀は同じということ。説明を聞いて良い表現の仕方だと思った。最後のシーンの“私”の考えとそこから考えたことを読み取ることができた。“私”は、おばさんや夏実、戸部君との関わりを通じて変わったと思った。

(生徒 O) 銀木犀の話の必要性が分からなかったけれど深く考えてみると、銀木犀の話は「自分」が変わるために必要な話だったんだと思いました。

(生徒 P) 最初この文章を読んだ時には思わな

かったことが授業を進めていくうちに「たしかに～」と思うことが多くなりました。そして、文章を読むと“私”の考えが変わっていることなどが分かりました。

（生徒 Q）私は、“私”が夏実と仲直りできると良いと思いました。みんなたくさんの意見が出てきて色々“私”の考えを考えられた。

④初読と読後のワークシートの比較

初読と読後のワークシートを比較して以下のようなことが見えてきた。

初読のワークシートでは、「中学生の“私”の心理、人間関係がつまっていたおもしろかった。」というような表面的な感想であると感じるが、読後には、「最後のシーンの“私”の考えとそこから考えたことを読み取ることで、“私”の気持ちの変化を同時に考えることができた。“私”は、おばさんや夏実、戸部君との関わりを通じて変わったと思った。」というように、“私”の心理は、本文のどの場面の心理なのか、人間関係とは誰との人間関係を表しているのかを本文に戻って考えることができていて、より深く考えることができていくことが分かる。また、「なんとなく最初と中ばんのストーリーは分かったけれど最後の方が良く分からなかった。」という記述が初読ではあったが、読後には、「最初この文章を読んだ時には思わなかったことが授業を進めていくうちに、たしかに～と思うことが多くなりました。」というような記述が見られ、分からなくて自分の中で漠然としていたものが、考え読み進めて行く中で、分かるようになっていくことが分かる。

5.まとめと課題

①まとめ

読後のワークシートに「私は、3班さんの意見を聞いて考えが変わった。初めは銀木犀という夏実との思い出を切り捨てるような形で前を向いたと読み取っていた。しかし、3班さんの意見は“私”と銀木犀は同じということ。

説明を聞いて良い表現の仕方だと思った。」

「みんなたくさんの意見が出てきて色々“私”の考えを考えられた。」のような記述が見られたことから、グループ活動を通して、自分のグループ内や他のグループの考えを聞いて自分の考えと何が違うのか考えることができていくことが分かる。また、多くの考えに触れ、登場人物の心情を読み取っていたことが分かる。このように、生徒が記述した読後のワークシート全体を通して、他の班の考えを聞いて新しい発見をしたという記述や深く考えることが出来たという記述、みんなの意見を聞いて考えることが出来たという記述が見られたため、多角的に考える力を育成するためにはグループのみんなで一つの正解を求めようとする活動にとどまらず、そこから発展させ、一つの考えだけに固執せず、多くの考えに触れ多角的な見方をすることができるようグループ活動が有効的であると考え。また、すぐにグループ活動を行ってしまうのではなくて、グループで考えていく上で、銀木犀の比較のように考えやすくなるような材料となるものをまずは全体で確認をし、そこからグループ活動へつなげていくことで、グループ活動はより活性化していくと同時に、生徒自身が教材全体を通してつながりを見出すことができると考える。

②課題点

グループのみんなで1つの正解を求めようとするグループ活動から、多角的な見方をするグループ活動を目指している一方、ある問題について必ず共通した1つの解答を求めなければいけないという、受験を見据えていかなければいけないということがあり、多角的なグループ活動をするには課題が残る。

2時間目で行った自分のワークシートを回して意見交流する活動の中で、ワークシートを回す際に生徒同士で言葉があまり交わされなかったのも、友達の考えで良いと思ったら言ってあげるようにするというような声掛けをしていくことも課題点の一つである。同じ

ように、3時間目でも、全体で共有した際、生徒の意見に反応する時間をもう少しとることが課題としてあった。筆者自身、実際に授業を行ってみて、教師側の声掛けが生徒の学びに大きく影響することを実感している。教師が分かりやすいと思ってした声掛けがある時には、生徒にとって分かりやすいものであるが、分かりにくく逆に混乱を招いてしまい、授業の流れを崩してしまいかねないことになると思う。

神奈川県立総合教育センター『はじめよう学習活動研究会～主体的に学ぶ生徒をはぐくむために～』には以下のような表が示されている。

表2 学び合いを促進する働きかけの例

学び合いを促進する働きかけの例

- ・「(先生にではなく) 隣の人に聞いてごらん？」
- ・「どういう意味か隣の人に説明してみよう」
「隣人は、今聞いた説明とは別の表現でもう一度説明してみよう」
- ・「隣同士で／グループの中で、疑問や感想を交流してスッキリしよう」
- ・「周りの人と相談して、もっと良い考えにしよう」
「みんなの考えを折り合わせてみよう」
「今、出されたいくつかの意見を合わせて考えるとどうなると思う？」
- ・「自分の意見がどう変わったのかを発表しよう」
- ・「一緒に学んで良かったことを一つずつ言ってみよう」
- ・「ここまでで学んだことをグループ内で話し合おう」

このように、学び合いを促進する働きかけの例がまとめられている。やはり、良く学べているグループの状況を全体にフィードバックして模範を示すこと、学びが停滞してしまっているグループがあれば、考えるための補助発問をすること、生徒の発言を教師が拾って他の生徒につなげるなど、教師の適切なかわりが必要であると考え。そのために、このような表を参考にして、自分でも作ってみて、どの状況にどのような声掛けが必要になるのか考えていくことが課題であると考え。このように表を作成して、いつでも自分の行った声掛けはどうだったか、他にどのような声掛けをすればよかったのかをいつでも見直すことができるようにしておくことで教師の力量を高めることにつながると考える。

6. 参考・引用文献

安東みきえ『星の花が降るころに』(光村図書出版「国語1」より)

神奈川県立総合教育センター(2015)はじめよう学習活動研究会～主体的に学ぶ生徒をはぐくむために～

中学校国語 学習指導書1 光村図書出版
山梨県教育委員会(2016)社会生活に生きる読解力向上を目指して 言語活動ハンドブック
岩崎直哉(2013)メタ認知、言語と思考、対話、読みの内化、言い換え、抽象のレベル 上越教育大学教職大学院

黒上晴夫・小島亜華里・泰山裕(2012)シンキングツール～考えることを教えたい～ NPO法人 学習創造フォーラム

千葉泰介・武川直樹・望月俊男・山下清美(2010)学生のグループワークを活性化する要因の調査 専修大学ネットワーク情報学会